

〈はじめに〉

私は大連市にある「大連日通」で総経理として2年間勤務し、2009年6月末退任し帰国した。まださほど時はたっていないが、大連はとても懐かしい。そして「大連」という言葉の響きが好きである。何がそんなに懐かしいのかと問われて答えるのは難しい。それは街の匂い、大地の匂いというようなものであろうか。その懐しの大連へ3月6日から12日まで旅行した。日記として一週間を綴ってみた。

◆第1日目……3月6日(日)

昨年の尖閣列島問題等で、日中関係が今も必ずしも良好とはいえない中で、6日の昼すぎに大連周水子空港に着陸。何か影響があるかと思っていたが、税関もスムーズに通過した。飛行機から降りて税関に向かう時、大連空港の持つ独特の懐かしい匂いで、「大連にようやく着いた」と実感した。

荷物を受け取り出口に向かうと友人が背のびして手を振っていて、1年ぶりの再会を喜んだ。タクシー乗り場に向くと70～80人くらいの列ができています。めずらしいほどきちんと皆不満も言わず整列してタクシーを待っている。よく見ると殆どタクシーが来ないのである。昨年も同じ飛行場に到着し、すぐタクシーに乗れたのに、「何かあったの?」と友人に聞くと、「等一下」と言って走り去った。少したってから、すぐ来いと手招きする。指さす方向に行くと、1年も洗車していないような15人乗りのマイクロバスにすぐ乗れと言うので急いで乗り込んだ。1人20元だと言っていたが、おそらく白タクに似たものと思った。

途中各所で残雪を見た。私がいた2年間ではこんなに積もっているのを見たことがない。寒いので粉雪しか降らず、しかも風の強い街なのでいつのまにか吹きとばされて積る雪はみたことがなかったのである。聞くと、2月末頃かなり降ったという。今日は「啓蟄」であるが、これでは当分虫も地中から出て来られまい。

タクシーに乗りかえ、8元払って(大連は初乗り8元)ようやく大連国際酒店に着いた。このホテルは人民路のそばにあり、公寓式酒店である。つまりマンション式のホテルである。従ってレストランはない。安くて小ぎれいだけがとりえといったところである。朝食は適当にホテル樓の快客(中国式コンビニ)に行行って買って部屋で食べてくれということであった。

快客で翌朝の食材を求めたあと、近くの伝統工芸品店に顔を出した。旧知の老板(オーナー)はとても喜んでくれて、お茶やおつまみを出してもてなしてくれた。そして数ヶ月

前にすぐ近くにスナックを始めたので見てくれという。店内はうす暗かったが、老板は若いだけに多種多様な商売をやってみようであった。彼は絵描きで、彼の描いたタテ1mヨコ4mの額に入った「万里の長城」は、私が勤めていた会社(以下大連日通と略す)の食堂の壁に掛かっている。

夕方は日本人の友人とやきとり屋に行った。勧められるままに松竹梅でほろ酔い気分となった。異国の地で飲む日本酒もいいものと思った。

◆第2日目……3月7日(月)

朝9時に大連日通の運転手がホテルに迎えに来てくれた。上背がありサッカーがとて上手とのことである。大連市はサッカーが盛んである。大連日通にもサッカー部があり、会社のある大連経済技術開発区の大会で何度も優勝している名門チームである。

開発区は、市内から30kmの距離がある。行く途中至る所でマンションの工事をしており、1年前に来た時にはなかった建物が忽然と建っている。その工事の速さに基礎工事はしっかりやっているのか、鉄筋は決められた本数だけ入っているのかと心配になる。大連は地震のない所だと皆言っているが、1976年に発生した唐山地震の時は揺れたと年配の中国人は言っていたと記憶する。

彼は日本語をある程度話せる。が、私の中国語会話の練習相手として到着までお付き合い願った。道路脇には、この時期ともなればそろそろレンギョウに似た黄色い花をつける迎春花という低木が花を咲かせはじめる筈だ。大連の春はこの花が咲きはじめる頃に到来するが、今年はずぼみさえはっきりしない。今年の冬は例年になく寒かったためらしい。

私の後任の総経理は、大連勤務は通算で9年目と大連を知り尽くしているひとである。私の中国語も、せめて5年も滞在できればかなり上達したであろうと思うと残念である。総経理に挨拶し、事務所や現場をまわり、一人一人と握手した。皆、昔のままで温かく迎えてくれ、今年も来てよかったなと思う。そして構内にある小さな花壇の石碑をじっと見る。この石は開発区にある標高600m強の大黒山のふもとから運んだ石である。

大黒山の標高は低いがとても目立つ美しい山で、晴れた日には市内からも遠望できる。石碑は高さ1.5米幅1米くらいの大きな石であるが、表面に「天道酬勤」(ティエンダオチョウチン)と言う文字が刻んである。私が総経理の時、ある人に「それを見るときっかり仕事をしなければ」と思うような四文字の熟語はないかと尋ねると、一週間後に「この四文字がいい。中国人なら誰でも知っている言葉だ」

と教えてくれたのだ。そして2009年2月の会社創立18周年記念日に除幕式を行った。社員の精神的支柱にと立てたものだ。

この会社で私は1年半余り日本語教室を開いた。社員の要望があり昼休みに週2回行った。若干の出入りはあったが20数名の生徒が勉強した。

夜はこの日本語教室の生徒たちといっしょに火鍋料理に舌鼓を打った。冬の大連は何と言ってもこの料理がおいしい。都合で会社を退職した人も来てくれ17名の生徒と当時の思い出話に花が咲き時のたつのを忘れた。皆心から私や家族の健康を気遣ってくれ本当にうれしく思った。いつまでもこの交流の場が続くよう願ってやまない。

◆第3日目……3月8日(火)

今日は、「婦女節」。国際婦人デーである。これは1910年に女性の地位向上のため提唱されたが、中国で婦女節を取り入れたのは、おそらく1949年の建国以降であろう。この日は企業の多くは女性だけ休日としたり、午後から休みとしている。つまり女性のためだけの日だ。

中国では「婦女能頂半边天」といい、つまり女性が天の半分を支えるという諺がある。さすれば残り半分を支えるのは男性だし、男女平等が建前の国であるから「男人節」もあってよさそうだが。デパートやスーパーも女性の衣類やアクセサリなど大バーゲンセールである。男はおよびでない。

仕方ないので、カメラ片手に市内をブラブラする。まず1年間住んでいた人民路にあるシャングリラホテルの近くを散策した。というのは人民路とほぼ並行して海寄りに長江路が走っており、この通りの両側は以前は古い建物が多く、人民路の華やかさと対照的にうらさびしい通りであった。これらの古い建物群を最近取り壊しはじめていたと聞いたので、その様子を知りたかったのである。

シャングリラホテルのそばを歩いて行くと向こうに赤茶けたレンガがうずたかく積まれている！当時よく食べに行った日本料理店や土産物店など跡形もなくなっていた。本当に爆撃を受けた後の廃墟のようで、心が沈んでい

くのを感じた。工事中であったニューワールドホテルがその威容を主張するかのように建っていた。

中国という国は土地は所有権は認められていないため、都市計画が承認されたら、あっという間に道路ができたり、建物が壊されたりする。中国は城壁に囲まれた都市が昔は沢山あって歴史を感じさせたものだが、その多くはいとも簡単に壊されてしまっている。



記念碑

大連市内は今あちこちでいろいろな工事を実施しており、なんとなくほこりっぽい。市内には同時に2路線の地下鉄工事を行っている。行く先々で青色のトタン(?)製の工事用の養生がしてある。私が大連にいたころは、大連は岩盤の上にあるので地下鉄などできるわけがないという声をよく耳にしたが、現実とは違った。遣り遂げる意思と技術があるからできるのであろう。2013年には完成する予定である。また市内から旅順まで快速電車を走らせるための工事がだいぶ進んでいた。これも2年後には開通するのではないだろうか。



変貌する大連市

昼は近くの「蟹漁師家」という日本レストランに入った。ここの店長の陳さんとは顔馴染みで大いに歓迎してくれ、いつものように杏仁豆腐を食後にサービスで出してくれた。

この店は、私がシャングリラホテル(別棟の公寓)に入居した当初、休日に散歩していると、どこかで見覚えのある看板が目に入った。

この店は本店が青山にあるが、町田市の私の家から車で10分くらいの所に横浜青葉店があり、家族で時折食べに行っていた店だったのだ。見覚えがあるはずである。アラスカやカナダから輸入した蟹の料理専門店、多少値段は高いがとてもおいしい。オーナーの岡田さんと話していると、この大連でも我が家からすぐ近くに接点があったのだと思ううれしくなり、それ以来日曜日にはこの店に行って食事したものだ。

夜は「川外川」という四川料理店で友人と食事をした。大連では有名な四川料理店で市内にいくつかこの店がある。当然辛い料理が多いが、とてもおいしい。大連の人は辛い料理がお好みようで、どこの四川料理店も人でいっぱいである。

◆第4日目……3月9日(水)

今日は、シャングリラホテルの後に住んだラマダホテルに向った。ここには1年住んだ。1989年開業で、市内では老舗のホテルである。総経理は日本人で、なかなか素晴らしいホテルである。ホテルで1階の土産物店の店長と1年ぶりの対面。店長は50才くらいで、南方の有名な観光地・桂林の出身。人なつっこく明るい性格でいかに桂林がよい所かの話をよく聞かされた。そんないい所なのに何でこんなに遠くまで商売に来ているのだろうか。どこで勉強したのか日本語はとても達者である。

昼はこの建物の1階にある「太能」という韓国料理店でピビンバを食べる。窓外の喧騒を眺めながら食べていると大連はやはりいいなと思うのである。

午後は、ホテル近くの青泥窪橋(チンニーワーチャオ)のデパートやスーパー、DVDショップなどを見て回る。この地名はその昔、このあたりの土地が上質の青い泥を含んでいたことに由来する。青泥を取りすぎて、窪地になり、この名がついたとももの本には書いてあるが、今は市内で有数の繁華街となっている。

食事の話が続くが、夕食は少し中華料理から離れ、インド料理店に行った。昨年この店に案内してくれた友人とまたここで大好きなナンとチキンスープをオーダーする。我々の隣の席を見ると、ヨーロッパ人と覚しき男性が中国人と話している。結構流暢な中国語を話している。日本人や韓国人が中国語を話すのは違和感がないが、白人が話すとどうもじっくり来ない。白人は世界中どこに行っても自国語と英語しか話さないものだと先入観があるからかも知れない。声をかけると相手もいろいろ話しかけて来る。聞けばイタリア人という。えーとイタリア語はどんなのがあったっけ?と頭脳を回転させても咄嗟には出て来ない。そうだ「さよなら」は「アリデベルチ」だったな、帰る時この言葉で別れようと思いつつ会話する。私から日本の監督にザッケローニにが来て日本のサッカーファンは喜んでいるよ、と少しお世辞も交えながら……。彼はよく仕事で大連に来るそうだ。この街に、ロシア人は比較的多いが、イタリア人と会ったのは今回が初めてであった。アリデベルチと言いながら店を後にした。

今日は9日なので9日の終りに9に因んで思い出したことを書いてみたい。

九(jiu)は中日辞典で調べると、4つの意味が出ている。①は数字の9。②は「数の多いことを表わす」とある。③は姓で、どうやら「九」という姓があるようだ。しかし未だにこの姓の人に出会ったことはない。そして④番目は、「冬至から81日間」。9日ずつ区切り、「一九」から「九九」までそれぞれの9日間を「九」と呼ぶとある。面白いではないか。中国各地どうなのか知らないが、大連では冬場に「三番目から四番目の九のあたりが一番寒い」と何度か聞いたことがある。冬至は12月22日頃だから、それに3×

9=27を加えた1月17日頃から4×9の26日頃が寒さの底ということになる。確かにその通りである。一体何処からこのような考え方が出てくるのであろうか。

◆第5日目……3月10日(木)

昼は取引先の営業の中国人と2年ぶりに会うことができた。そして少し風変わりな店に案内してくれた。タクシーで大連商城というデパートのそばで下車。ここの6階にその店があると言う。一体どのような店だろうと考えていたら、大きな木材で門がつくられてある「王府」という店の前に来た。入り口にきらびやかな民族衣装を着た若い女性が立っている。ここは満族料理のレストランですと言う。270年の長きに渡って統治をした清朝をつくりあげた民族の料理である。店の奥に進むとヌルハチなのかこの店のオーナーのご先祖なのか分からないが祭壇がしつらえてあり、おごそかな雰囲気を出している。

さて、メニューを出されてもよく分からないので、一番満族料理らしいものを、と言うと出てきたのは「老太后飯包」であった。丸いレタスの中に団子状にしたごはんに特製のミソをつけ、他にいろいろ加えまくって手にもったまま食べる料理であった。おいしかったとだけ言おう。実際に食べてみないと分からないからだ。

午後は今回の旅行の宿泊とキップを手配して貰ったベストトラベル社の大連事務所に出向き、社長のソルさんと旧交を暖め、明日の旅順への車の手配をお願いした。

夕食は、前述した蟹漁師家でソルさんと営業部長と私の3人でゆったりした時間をすごした。この蟹漁師家といえば二胡と中国琵琶の演奏を紹介しなければならない。

二胡を弾くのは、牛麗麗さんという大連では有名な演奏家である。琵琶の人は時々交代するので名前は知らない。演奏は、毎晩7時から1時間で、日本の歌と中国の歌を交互に約10曲弾かれるのである。日本の歌は、「古城」とか「ふるさと」や「北国の春」など、否や応でも日本を思い起こさずにはいられない気持ちにされ、日本人客には特に評判なのである。一度牛さんの演奏会に出向いたが、大きな会場が、いっぱいなのには驚いた。二胡の音色には、中国人の魂を揺さぶるものがあるのであろうか。

◆第6日目……3月11日(金)

ベストトラベル社の車で、運転手と日本語のできる中国人スタッフと私の3人で旅順に向った。友人が約70年前、旅順で住んでいた家がまだ残って



いるのでできたら写真を撮って来て欲しいと頼まれたからである。友人の生まれは大連である。グーグルの検索でまだ残っていることが分かったそうで、航空写真や当時の地図を見せて貰った。本人によれば、近代中国都市集成・1918年の地図に当時の家が掲載されているという。かれこれ築100年になる家である。この家に3才のころ住まわれていたそうだが、戦火を潜りぬけて、しっかり建っているその家を褒めてあげたい気持ちが起こり、私は写真を撮りに行こうと決意した。ただ中国海軍の管理下にある場所なので、くれぐれも無理はしないようにと心配頂いた。

1時間半後我々は現地到了。番兵が1人立っており、遮断機が下りて中に入れない。そばの管理棟でこの責任者らしき人が坐ってじっとこちらを見ていた。ベストトラベルのスタッフと一緒に管理棟に行き、スタッフからよく説明させた。私からは、友人の依頼ではるばる日本から来たこと、写真を撮るだけなので許可して欲しいと言うとOKしてくれ、すぐ遮断機を上げてくれた。家は赤茶けたレンガ造りで、流石に時間の移ろいを感じさせたが、当時としてはかなり立派な家であつたらう。周囲には、新しいマンションがすぐ近くまで迫っていた。10数枚撮ったあと、管理棟に戻りお礼を言いながら「近い将来取り壊す予定があるのか」と訊くと「将来のことは分からない」という答えが返ってきた。帰る時、番兵に写真を撮ってよいか尋ねると「否」であつた。無理に撮って写真を没収されてもいけないので入り口付近の写真はやめにした。「再見」と言って別れたが、何とか友人のために歴史的な建物として残して欲しいと願つた。

遅めの昼食後、ホテルで休息し、テレビを見ていると現地時間の3時頃(日本時間4時)であろうか? ニュースで日本で大地震が発生したことを報道しはじめた。そのうち大津波で家ごと流されている映像をくり返し流しはじめた。最初は信じられず映画の1シーンのような印象を受けた。そのうち震源は宮城県沖の海底であることが分り、ニュースのキャスターも真剣な顔つきで報道している様子を見るとこれは大変なことが起こつたのだとショックをうけた。

東京の辺りはどうなのかすぐ心配になつたが、日本のテレビのようにすぐ各地の震度を表示したりしない。携帯電話で自宅に電話したがつながらない。ホテルの部屋にいてもこれ以上の情報は入手できないので大連日通とも関わりの深いN保険会社へ電話した。ちょうど代表が席にいるとのことでそこにお邪魔した。当然地震のことはご存知で、インターネットで様子を見られていた。私も見せてもらい、状況が少しずつ分つてきた。その会社の電話を借りて自宅や家内の携帯などにも電話したが、やはりつながらない。明日の午後1時半の飛行機で日本に着くので、帰つてからのことだとハラをくくつた。そのうちに上の娘から



築100年になる友人の旧家

「こちらは皆無事です」とメールが入ってきてやっと安心した。

◆第7日目……3月12日(土)

朝7時のニュースを見ると新しい映像を加え、やはりくり返し大地震の惨状を流している。チェックアウトし、10時頃ベストトラベル社に行きソルさんに情報を求めた。

こうした状況下では、馴染みの旅行社が近くにあるのは本当に心強い。ソルさんは、「成田空港も被害にあつたらしい。飛行機は大連にいつ来るかわからない。もう一泊していけば」と気楽に言う。最悪それしかないかと考えていると「午後4時過ぎに大連に到着するということだが、まだ成田を飛び立っていない」との情報が入ってきた。出発時刻が大幅にズレ込むため、いつ頃空港に行けばよいかを聞いてもらおうと、「13時30分のフライトになっているので、13時までにカウンターで手続をしなければいけない」との回答であつた。ということは空港内のレストランもない場所で3時間以上も1人で待たねばならないのかとガツカリしたが、日本に帰れるわけだからと気を取り直した。

空港に昼過ぎに到着し、出国手続きを済ませ搭乗口近くに腰を下ろした。登乗券を見せれば、お弁当を渡すとアナウンスがあつたので、パサパサしたサンドイッチとバナナの入った弁当とペットボトルを受け取つた。

飛行機は予定より少し早く3時半ころ無事着陸。搭乗客は窓から見える機影に安堵の表情だつた。準備を急いだらしく、4時過ぎに離陸した。眼下に見える滑走路に「また来年来るよ」と別れを告げた。機内では朝6時のNHKニュースを流したので、よく事情が理解できた。

成田には19時20分ころ(日本時間)、少し早めに着いたが、機内で30分待たされようやく外に出られた。それから自宅までの難行苦行は敢えて記す必要はないだろう。結局3月13日午前1時すぎに自宅に着いた。

思い出多い旅行となつた。(完)